



Title	イアソン・ヒュプシピュレ・メデイア・テセウス・ア リアドネ：ギリシア・ローマ神話における時系列上 の矛盾とオウィディウス
Author(s)	西井, 奨
Citation	フィロカリア. 2026, 43, p. 13-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イアソン・ヒュプシピュレ・メデイア・テセウス・アリアドネ

——ギリシア・ローマ神話における時系列上の矛盾とオウイディウス——

西 井 奨

1. はじめに——本論考の目的
2. 時系列上の矛盾と『ヘーローイデス』
3. 先行のギリシア文学と『変身物語』
4. 『ヘーローイデス』の時系列上の矛盾の解消

1. はじめに——本論考の目的

ギリシア・ローマ神話に登場する人物たちの物語が、別々の作家で様々な形で伝えられることによって、作家ごとに異なるバージョンが存在する、ということはしばしばある。それは作家ごと・伝承ごとの違いとして、一般には許容されているものだと思われる。しかしその一方で、そうして伝えられる人物たちの物語群を統一的に時系列順に並べてみると、人物間の関わりにおいて明らかに「時系列上の矛盾」が生じている、ということがある。そのような矛盾の

一例としてあるのが、イアソン・ヒュプシピュレ・メデイア・テセウス・アリアドネの五人が関わる物語群である。この物語群においては、ヒュプシピュレが「アリアドネの孫」とされるにもかかわらず、時系列的にはヒュプシピュレとイアソンの物語の後にアリアドネとテセウスの物語が続く、という矛盾がある。こういった時系列上の矛盾については、これまでのギリシア・ローマ神話やそれを題材とする作品の研究ではとりたてて着目されてこなかったように思われる。その理由はおそらく、一般的に「神話の矛盾」については作家ごと・伝承ごとの違いとして許容されてきたからであろう。しかしギリシア・ローマ神話を集大成的に扱っているオウイディウスの作品にとって、イアソンらの物語群のような時系列順の矛盾は作品創作に際し見過ごせざるものとしてあつたはずである。そこで本論考では、オウイディウスの作品中の特にギリシア・ローマ神話を

題材とした『ヘーローイデス』と『変身物語』において、これらイアソン・ヒュプシビュレ・メデシア・テセウス・アリアドネの物語群がどのように描かれ、この物語群の矛盾に詩人オウイディウスがどのように対処しているかについて示すことで、オウイディウスの創作のメカニズムの一端を明らかにしたい。

2. 時系列上の矛盾と『ヘーローイデス』

ここでまず、一般的に知られるイアソン・ヒュプシビュレ・メデシア・テセウス・アリアドネの物語群の内容について確認しておく。^①

イオルコスの王権を叔父ペリアスに奪われたイアソンは、王権を父に戻させるために金羊毛皮を求めてアルゴ―船で辺境の地コルキスへと向かう。その途上、イアソン一行はレムノス島の女王ヒュプシビュレに歓待され、イアソンとヒュプシビュレは関係を持つ。

ヒュプシビュレのもとを脱した後、紆余曲折をへてコルキスにたどり着いたイアソンは、金羊毛皮を手に入れるための試練をコルキス王から言い渡される。そこでイアソンはコルキス王の娘メデシアと結婚の約束をし、魔術を操るメデシアの助力を受けて試練を果たし、さらに金羊毛皮を奪取してメデシアと共にイオルコスに戻る。その後、王権を返さないペリアスを死に至らしめ、イオルコスを離れコリントスに移住し、イアソンはメデシアとの間に二子を儲ける。その後、コリントス王家の富に心移りしたイアソンは、メデシアに離縁を言い渡す。ちょうどその折、アテナイ王アイゲウスがメデ

シアのもとを訪れ、メデシアが亡命した際の受け入れを約束する。そのアイゲウスはコリントスからトロイゼンに着き、そこでトロイゼン王女との間に子を儲ける。この子がテセウスである。

一方、メデシアはイアソンへの復讐として二子を殺害し、アテナイへと向かいアイゲウスの妻の座に収まる。後に成長したテセウスがトロイゼンからアテナイに帰り、アイゲウスとテセウスは父子の認知を果たす。このテセウスを殺害しようとして失敗したメデシアはアテナイを離れる。

その後、テセウスはクレタ島に潜入し、迷宮に住む怪物ミノタウロスを倒し、クレタ王女アリアドネの助けで迷宮を脱出し、アリアドネと共にクレタ島を脱出するが、アリアドネを帰路の途中の島に置き去りにする。またアイゲウスは、テセウス帰還の際にテセウスが死んだものだ勘違いして自殺し、以後、テセウスがアテナイ王となる。また一方、置き去りにされたアリアドネは酒神ディオニュソスに救われディオニュソスの妻となる。

以上がイアソン・ヒュプシビュレ・メデシア・テセウス・アリアドネの物語群であるが、ここで一つ時系列上の矛盾が生じる。それは、「ディオニュソスとアリアドネの子の一人がトアスであり、そのトアスの娘がヒュプシビュレである」、ということである。この伝承はアポドロス『ギリシア神話』の次の二箇所から確認できる。

ἔνθα Διόνυσος ἐπαφελὶς Ἀριάδνης ἥπτταε, καὶ κοίτας εἰς

Ἀῆλινον ἐμὴν, καὶ γευνὰ Θόαντα Στάφυλον Οἰνοπίαντα καὶ
Τιτάρηθον.

その地（ナクソス）でディオニュソスがアリアドネに恋して彼女を奪い、レムノス島に連れて行って交わった。そしてトアス、スタピュロス、オイノピオン、ペバレットスを生んだ。（アポロドロス『ギリシア神話』摘要 1.9（高津春繁訳））

οὗτοι ναυαρχοῦντος Ἰάκωνος ἀναχθέντες προσίοχουσι
Ἀῆλινω, ἔτυχε δὲ ἡ Ἀῆλινος ἀνδρῶν τότε οὐσα ἔρημος,
βασιλευμένη δὲ ὑπὸ Ὑγμύλης τῆς Θόαντος δι' αἰτίαν τῆνδε.
これらの人々をはイアソンを船長として海に出、レムノスに寄港した。次のごとき理由からその時レムノスはたまたま男が一人もいなくて、トアスの娘ヒュプシピュレによって治められていた。（アポロドロス『ギリシア神話』1.9.17（高津春繁訳））

このことから、「アリアドネの孫として生まれるはずのヒュプシピュレが、それよりもずっと以前にイアソンと出会い関係を持っている」という時系列上の矛盾が生じている。

それではオウイディウスが神話を題材とした作品を創作するにあたり、この矛盾にどう対処したか、まず彼の初期作品の『ヘーローイデス』から検討する。『ヘーローイデス』は、ギリシア・ローマ神話の物語中で登場人物が書いた書簡という形式の作品である。こ

れは、女性の登場人物を書き手とする単独書簡形式一五編と、女性と男性の登場人物の往復書簡形式六編三組からなる。これらは『恋の歌』『恋の技法』などのオウイディウスの他の初期作品と同様、エレゲイアの詩形で作られている。この『ヘーローイデス』の単独書簡中、第六歌が「ヒュプシピュレからイアソンへの手紙」、第一二歌が「メディアからイアソンへの手紙」、第一〇歌が「アリアドネからテセウスへの手紙」となっている。第六歌はヒュプシピュレがレムノス島でイアソンと関係を持ち別れた後、イアソンがイオルコスにメディアを連れて帰還したと伝え聞き、メディアの危険性ど、イアソンの妻への自身の相応しさを訴えるものである。第一二歌は、コリントスに移住後しばらくして、イアソンから離縁を言い渡されたメディアが、復縁の嘆願と復讐の示唆をするという内容になっている。第一〇歌は、ナクソス島にてテセウスに置き去りにされたアリアドネが自身を助けるよう訴えるものとなっている。これら三つの書簡を創作するにあたり、イアソン・ヒュプシピュレ・メディア・テセウス・アリアドネの物語群が抱える時系列上の矛盾の問題があることについては、第六歌のヒュプシピュレの書簡の以下の箇所からうかがえる。

si te nobilitas generosaeque nomina tangunt. 113
en ego Minoo nata Thoante feror. 114
[Bacchus avus: Bacchi coniunx redimita corona 115

高貴な家柄や名高い系譜がお心を動かすなら、ほら私だって、ミノスの血を引くトアスの娘と言われます。「バックスが祖父です。バックスの奥方は額に冠を載せ、かわいい星座となって星の光を輝かせています。」⁽³⁾(オウイディウス『ヘーローイデス』6)

113.116 (高橋宏幸訳⁽⁴⁾)

113.114⁽⁵⁾ ヒュブシピュレは「ミノスの血を引くトアスの娘」すなわちミノスーアリアドネートアスーヒュブシピュレという自身の血統について言及し、また 115.116⁽⁶⁾でもバックス(ディオニュソス)とアリアドネを祖父母として言及している。このように『ヘーローイデス』にも上述の時系列上の矛盾の問題があるわけだが、もちろん『ヘーローイデス』自体は各書簡を神話の時系列順に配置して読むように作られたわけではないので、こうした問題はあまり気にしなくてもよいのかもしれない⁽⁵⁾。しかし、「オウイディウスの描くギリシア・ローマ神話」として物語群を統一的に把握しようとするならば、こうした矛盾がもたらす違和感は無視できないものとなるであろう。

3. 先行のギリシア文学と『変身物語』

さてここで、オウイディウスに先行するギリシア文学で、オウイディウスがイアソン・ヒュブシピュレ・メデイア・テセウス・アリ

アドネを描くにあたりオウイディウスが明らかに創作の参考にしていると思われる二作品の内容を確認したい。それはエウリピデス『メデイア』とアポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』である。

エウリピデス『メデイア』では 663.758 の第三エペイソディオンから、アテナイ王アイゲウスがコリントスにいるメデイアのもとを訪れ、メデイアの亡命後の受け入れを約束する。アイゲウスはトロイゼンに向かう途中であり、自身に子供がないことに悩んでいるという状況でのことである。この時点でテセウスはまだ生まれてすらおらず、それゆえそれより以前にテセウスとアリアドネも関わりようがない。エウリピデスによる神話の描き方に則るならば、イアソンがメデイアに出会うより以前に出会っていたヒュブシピュレの祖母はアリアドネではない、ということになる(ただしエウリピデスの『メデイア』中では一切ヒュブシピュレに言及されることがないので、エウリピデスはイアソンとヒュブシピュレの関わりすらないものとしているのかもしれない)。

また一方で、アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』ではイアソンがヒュブシピュレやメデイアと出会う前の、アルゴ船の乗組員を募る段階で、テセウスが既にアテナイ王として存在していることがうかがえる。

Θησέα δ', ὃς περὶ πάντας Ἑπεχθίδας ἐκέκατο,

Ταυραρίην αἰδηλὸς ὑπὸ χθόνα δεσμὸς ἔθηκε,
Τεῖρεβας ἑσπόμενον κοινὴν ὁδόν· ἥ τέ κεν αἴψα
ῥηϊτερον καμάρτοιο τέλος πύστεον ἔδεντο.

だがエレクトεύスの子らすべてに勝るテセウスは、タイナロンの地下に見えない束縛が引き止めていた——ペイリトオスと甲斐なき道を降ったのだ。二人がいれば労苦の終わりは皆にとつて、もつと容易くなっただろう。(アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』1: 101-104 (堀川宏訳))

アポロドロス『ギリシア神話』摘要1-126の記述によれば、テセウスがペイリトオスと共に冥界に下り拘束されたのは、テセウスがアイゲウスの死後にアテナイ王になってからのことだとされる。またテセウスとアリアドネの間の出来事やその後のディオニュソスによるアリアドネの救済と結婚は、『アルゴナウティカ』では過去の事として描かれる。まず1: 609-909でイアソン一行がレムノス島で女王ヒュプシピュレに歓待される際、ヒュプシピュレが「トアスの娘」だということには何度も言及される(ただしそのトアスの父母については言及されない)。また3: 997-1117ではテセウスとアリアドネの間の出来事と、アリアドネが後に神々に冠座になったことが述べられる(ただしアリアドネの子についてはここで言及されない)。そして第四巻では、

οἷς, μέτα καὶ πέπλον δόσαν ἱερὸν ὕμνυλῃης
πορφύρεον· τὸν μὲν ῥα Διωνύσορ κάμουν αὐτὰι
Διὴ ἐν ἀμφιάλῳ χάριτες θεαί, αὐτὰρ ὁ παῖδι
δῶκε θόαντι μεταὔτις, ὃ δ' αὖ λίπευ ὕμνυλῃη,
ἥ δ' ἔπτορ Διονυίδη πολέουιν μετὰ καὶ τὸ φέρεσθαι
γῆνεον εὐεργὲς ξεινίῳν. ...

その中にヒュプシピュレから貰った、神聖な緋紫の外套も入れた。海に囲まれたディアで優雅の女神(カリテス)がみずからディオニュソスに織ったもの。この神が後にそれを息子トアスに与え、彼がヒュプシピュレに残して、彼女がアイソンの子に入念に織られた歓待の印として、多くの宝物と一緒に持たせたのだ。(アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』4: 423-428 (堀川宏訳))

と、ディオニュソスとアリアドネからトアスが生まれ、その子がヒュプシピュレであることが明瞭に示されるのである。

『アルゴナウティカ』はイアソンがメデアと共にイオルコスに着いたところで完結するわけだが、この後に続く神話のことを考慮すると、既に作中でテセウスやアリアドネに言及しているので、エウリピデス『メデア』とは逆に、「子のいないアイゲウスが、イアソンと不仲になったメデアのもとを訪れたこと」・「メデアが後にアイゲウスの妻に収まりテセウスを殺害しようとしたこと」が

ないことにされている。

オウイディウスはこれらエウリピデスやアポロニオス・ロディオスの作品を踏まえて神話を題材とした創作をしているわけだが、次に、オウイディウスが『ヘーローイデス』発表の後に完成させた『変身物語』では、どのようにイアソン・ヒュプシピュレ・メデア・テセウス・アリアドネを描いているの確認したい。『ヘーローイデス』は各書簡がそれぞれ作品として独立しうるものであったのに対し、『変身物語』は叙事詩形式で時系列順に物語が描かれているため、これら五人の物語群の時系列上の矛盾はオウイディウスにとって『ヘーローイデス』創作時よりもずっと問題に感じられたはずである。

『変身物語』ではまず 7.1158 で、アルゴー船でのイアソン一行の冒険譚と、イアソンとメデアの恋の様子、そして金羊毛皮を奪いイオルコスに帰還したことまでが描かれる。この箇所およびこの箇所以前では、テセウスについて一切言及されず、またイアソン一行がヒュプシピュレに歓待されたことについても言及されない。ここからペリアス殺害とコリントス移住・そしてコリントスでの子殺しを経て、7.402-424 では、メデアはアテナイ王アイゲウスの妻となり、その後訪れたテセウスを、息子と気付かないアイゲウスに毒の杯で殺させようとするが、間一髪でアイゲウスは息子だと気付き、テセウス殺害に失敗したメデアがアテナイを逃れるまでが描かれる。そして 8.169-182 で、テセウスがクレタの怪物ミノタウロ

スを倒し、クレタ王女アリアドネを連れて脱出するが、アリアドネはナクソス島で置き去りされ、酒神ディオニュソスが現れて彼女を救い、彼女の額の冠を星座にしたことが述べられる。なおここでディオニュソスとアリアドネの間にできた子やその子孫については一切言及されない。

このように『変身物語』でヒュプシピュレについては、イアソン率いるアルゴー船の物語の箇所でも、ディオニュソスとアリアドネの物語の箇所においても全く言及されない。オウイディウスはこのように、エウリピデスとアポロニオス・ロディオスの作品を創作の源泉としていようと、時系列順に物語を綴るという『変身物語』を作るにあたり、時系列上の矛盾となるヒュプシピュレという存在への言及を巧みに避けることで、自身の物語叙述をより一層精緻なものにしたのだと考えられるのである。

4. 『ヘーローイデス』の時系列上の矛盾の解消

それでは、オウイディウスが『変身物語』より前に作った『ヘーローイデス』では、各書簡の書き手の登場人物間での時系列上の矛盾は仕方がないものとして受け入れるしかないのだろうか。ここで、『ヘーローイデス』の各書簡を時系列順に並べる場合、二通りの場合が考えられ、それぞれの場合での矛盾の解消とそれに伴う問題点について考察してみたい。まず考えられるのが、アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』と同様の時系列を採用して、①アリ

アドネの書簡（第一〇歌）↓ヒュプシピュレの書簡（第六歌）↓メデイアの書簡（第二二歌）の順の時系列と考える場合である。メデイアの書簡ではアイゲウスには一切言及されておらず、またアリアドネの書簡においてもメデイアには言及されていないので、『ヘーロイデス』ではこのような神話の時系列であるとしても矛盾はないものとなる。しかしそうすると新たな問題点として、アポロニオス・ロディオスの場合と同様、この神話の時系列ではメデイアとアイゲウスおよびメデイアとテセウスの物語は存在しないことになる。

次に②ヒュプシピュレの書簡（第六歌）↓メデイアの書簡（第二二歌）↓アリアドネの書簡（第一〇歌）という順番について改めて考察する。この場合は本論文第二章でも述べたように、第六歌の113-116でのヒュプシピュレの祖父母への言及、すなわちヒュプシピュレがアリアドネの孫であるということが時系列上の矛盾をなすものとなる。²⁷この箇所について前後の111-112と117-118を加えて改めて引用する。

vir meus hinc ieras, vir non meus inde redisti—	111
sim reducis coniunx, sicut euntis eram.	112
si te nobilitas generosaeque nomina tangunt:	113
en ego Minoo nata Theante feror.	114
[Bacchus avus: Bacchi coniunx redimita corona	115
praeradiat stellis signa minora suis.]	116

dos tibi Lemnos erit, terra ingeniosa colenti: 117
me quoque dotalis inter habere potes. 118

ここを発つとき私の夫だったのに、戻ったら私の夫ではないなんて。戻ったのだから妻にしてください。高貴な家柄や名高い系譜がお心を動かすなら、ほら私だって、ミノスの血を引くトアスの娘と言われます。『バッコスが祖父です。バッコスの奥方は額に冠を載せ、かわいい星座となつて星の光を輝かせています。』レムノスを婚資としましょう。農夫のために心優しい土地です。私を結納の奴隷の一人にしてみらってもかまいません。（オウィディウス『ヘーローイデス』6.112-118（高橋宏幸訳））

ここで、傍線を付した113-116全てを「真正でない」として削除する、ということはできないだろうか。この113-116を削除すると、ヒュプシピュレの血統については言及されないことになり、それにより時系列上の矛盾は差し当たり感じられないものとなる。さて『ヘーローイデス』の校訂テキストとコメンタリの著者P.E.Knoxは、115-116の二行については、「113-114にきつちなく続いているものでありオウィディウスの手によるものではない」として削除することを提案している。²⁸この115-116の削除提案に加えて113-114も削除するのも、それによって時系列上の矛盾が解消されるように感じられるという点から妥当なものとなるかもしれない。

一方もし、②の書簡の順番であつても113-116は真正であるとす

るなら、オウィディウスは『ヘーローイデス』の完成後、イアソン・ヒュプシピュレ・メディア・テセウス・アリアドネにまつわる時系列上の矛盾を改めて認識し、次の『変身物語』執筆に際しては、この時系列上の矛盾を回避するために、ヒュプシピュレに言及するのを一切やめたのだということが出来るだろう。

註

(1) これらの物語は、アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』エウリピデス『メディア』、アポドロロス『ギリシア神話』、ヒュギヌス『神話伝説集』などから要約的にまとめたものである。

(2) 高津春繁(訳)『アポロドーロスギリシア神話』岩波書店、1953から引用する。以下同様。

(3) この115-116の括弧は、校訂者のP. E. Knoxが削除提案をしていることを示す。これについては後述する。

(4) 高橋宏幸(訳)『オウィディウスヘーローイデス』平凡社、2020から引用する。以下同様。

(5) たとえばPalmer, A. P., *Ovid, Heroides*, new introduction and bibliography by D. F. Kennedy, 2 vols. Exeter 2005 (Oxford 1898, 1967) や Jacobson, H., *Ovid's Heroides*, Princeton 1974など『ヘーローイデス』の基本的な先行研究では、こういった時系列から神話全体を把握しようとする視点はない。近年の先行研究において、ここまでは一つ一つ挙げないが、各書簡の Intertextuality から解釈するという

視点がある一方で、神話の時系列上の矛盾には無頓着のようである。

(6) 堀川宏(訳)『アポロニオス・ロディオスアルゴナウティカ』京都大学学術出版会、2019から引用する。以下同様。

(7) Knox, P. E., *Ovid Heroides: select epistles*, Cambridge 1995, 194-195.